

# 佐伯氏関係史料『雑記』

佐伯 朗

(会員) 東京都練馬区石神井台

(一) 藤堂高虎について書いたものに『高山公実録』という物がある。成立は嘉永年間で藩校内の掃葉閣という編纂局で編纂された書であるが、藩士の由緒書きを多く引用している。その中に次のような一文があった。

『先祖次郎右衛門儀、天正年中大和大納言様島津義久を御攻被遊候節、大和大納言様は七代前の権之助城へ御移被遊、高山様は先祖次郎右衛門御宿申上候』

この文から日向へ南下する豊臣秀長が梅牟礼城に、當時秀長の重臣であった高虎が佐伯惟澄の宅に一泊した事が分かる。

また、慶長の役、慶長二年九月十六日の海戦で毛利高政は海に突き落とされ、危うく命を落としかけたが、この時、高政を海から引き上げたのは藤堂家臣の津村作右衛門という武士である。

「毛利伊勢守（民部大輔）殿船を敵取巻、矢七本御負被成候て海へ御落火急に成時節、作右衛門に助け呉候得と被仰候に付、其儘海に飛込伊勢守殿を引上、七本の矢抜候て御命を助け申候、御帰陣後、高山様へ御礼被仰進作右衛門達て御賞被成候得共、不被進候由、作右衛門へも為御礼使者並御懇の御礼状被下候由」

(二) 堅田合戦などで佐伯惟定の軍師を務めた山田匡徳の経歴が判明したので左に記す。これは日本城郭大系、匡徳軍功記によって書いたものである。

## 【山田宗昌】

次郎三郎、土佐守、土佐入道匡徳、また京得と称す。

父は日向国新山城督であった山田備前守宗統。山田氏は伊勢国を出自とし、藤原秀定の後裔という。元暦年間中の平家没落に伴い筑後に下向し、十七代・宗経の時に日向国児湯内山田に移り、長男は山田六十町を領して山田を姓氏とし、次男は荒武三十町を領して荒武氏を称し、秀定より十八代・宗方の頃より伊東家に従った。氏神は春日大明神という。

永録二年、飢肥楠原行屋尾に於て合戦の時、島津方の

将・亀澤主水を討ち取る。

永祿十一年、伊東軍二万の兵に包囲された飢肥城の島津忠親は糧食尽きて救いを都城に求めたので、同年二月二十一日、島津氏は一万三千の兵を以て酒谷城より阿田ノ越にかかり兵糧を飢肥城に入れようとした。城兵は大迫口に出てこれを受け取るうとしたが、伊東方は兼ねてから計略を定めていたので薩兵が竹野にかかるると諸方から一斉に討って出て薩兵を小越の辺りに取り囲み島津方を大敗させた。これを小越合戦というが、この時、宗昌は島津方の将・和田民部少輔を討ち取り、この功により翌々年、伊東義祐から感状を賜った。

元龜三年、木崎原合戦の敗戦により伊東家は衰退、天正五年十二月、ついに居城を捨て大友氏を頼る事になった。宗昌も義祐に随行し、義祐一行は米山々中から臼杵山中を抜けて、天正六年一月、大友方の使者に迎えられて大野郡の光明寺に保護された。

天正六年三月、大友氏が島津方についた土持氏を滅ぼした結果、新納以北は大友氏に属することとなった。そこで伊東家の旧臣達は島津氏の拠点である都於郡・佐土原の両城の近くに位置する児湯郡木城に石ノ城を築い

て、同年六月、宗昌と長倉勘解由らをはじめとする数百人の兵でこれを守った。

これを見た島津氏は七月六日、伊集院忠棟を大将として大軍を以て攻めたが、宗昌らは同城に籠って力戦したので島津方は五百余人の死傷者を出し佐土原に向かって敗走した。後、大友義統は七月十七日づけで宗昌に感状を与え、この功を賞している。

しかし島津氏は九月十五日、島津章久を大将として再び大軍を以て攻め寄せた。伊東方は三日三晩に渡り戦ったが、兵糧が乏しくなったので脱出する事にした。この帰途、長倉勘解由は野伏りに遭い敢無く落命したが、宗昌は九死に一生を得て逃げ帰ることができた。

同年日向に侵攻した大友氏は十一月十二日の小丸川合戦で惨敗。この時、宗昌は高城より数十理後方の御門城を柴田紹安・同五衛門尉らと守っていたため、追撃を受けることなく豊後に退却した。

天正七年四月、伊東義祐は日向高城合戦の敗北によってか、豊後から逃走し、伊予国の河野氏を頼った。この時、宗昌は豊後に置き去りにされたので佐伯家に來たらしい。「佐伯惟定領内の内に後室有りたるに縁を結び居

住」とある。

以後、天正七年よりの佐伯周辺での数度の戦闘に宗昌が活躍した事は諸書に詳しいので省略。惟定に軍法を進言した軍功により宗昌は大友宗麟より感状を与えられた。

天正十五年、秀吉の九州征伐により島津氏は秀吉に降伏。翌年八月、伊東祐兵は旧領を回復し飢肥に戻った。この頃、豊後での武勇により宗昌は島津義久より三百町で招かれたが応じず、また宗麟より豊後で百五十町の采地を与えるといわれた時も辞退し、宗麟は代わりに鎧一具と兜を宗昌に与えた。

伊東家再興により宗昌は伊東家に帰参し、文禄元年、朝鮮陣に祐兵に従い出陣した。帰陣後知行三百石、家老職を祐兵より命じられたが辞退し、酒谷の地頭職を申出、百石のみ拝領した。慶長の朝鮮再遠征に従う。元和六年六月三日、酒谷に於て死去。七十七歳。法名・学翁匡徳。墓は今も酒谷に存在し写真がそれである。付近を聞き

回ったところ、太平洋戦争中は匡徳が戦上手だった事にあやかっ、参詣する人が結構いたそうである。また山田家の家系は現在まで続いており、子孫の方は日南市板

敷に住んでおられる。手紙で問い合わせた所、系図はあるが佐伯家との関わりについては何も記されていないという事であった。



山田匡徳の墓

宮崎県史 史料編 「山田文書」

佐伯惟定書状（折紙）

幸便候間一筆申候、其表御無事之由目出候、仍先度者  
柳井弥右衛門尉用所にて罷下候處ニ、御懇ニ承候、乍夜  
中畏入候、殊知行なと重々御あんとのよし御面目不及申  
候、其元御ひま候者、そとく御のほり待申候、我等事  
も近々上洛之覚悟ニ候、次郎事もいまた在京仕候間、か  
さねくの儀めいわくニ候、急候間、不能細筆候、恐々  
謹言、

五月廿八

惟定（佐伯）（花押）

京徳

まいる

人々御中

佐伯惟定書状（折紙）

〔切封墨引〕

尚々其以後不申承朝暮御床敷存斗ニ候、爰元何も  
無何事候間重而可申候、以上、

先度者預御懇札畏入存候、従此方彼節々以書状可申入候  
處ニ、遠路故無音所存之外候、其元御無事之由尤目出候、  
此表之儀も無相替事候、可御心安候、殊更関東表  
御安中ニ相成候条、世上弥可為無事候間、御越山待入申  
候、急候之条大かたニ申候、恐々謹言、

八月十五日

惟定（佐伯）（花押）

京徳まいる

御人々御中